大阪支部「民舞」研究・実践の歩みとこれから

前田　雅章

１．ハノイ滞在で

学生時代、日本ベトナム友好協会主催のベトナム語研修会でハノイに一ヶ月滞在したことがあります。1980 年の 8 月でした。当時のベトナムは 1975 年にベトナム戦争が終結し解放されたものの、カンボジアへの進攻、中越紛争、ベトナム難民など、政治的、経済的な混乱で世界から孤立した状態でした。ベトナムは、1986 年から市場経済を取り入れたドイモイ政策が始まり、現在のような経済発展していくのですが、当時は、統制経済政策の失敗で人々は苦しい生活を強いられていました。行きかう人々は痩せこけて街全体は全く生気がなかったことを覚えています。貧富の差は少なく、まさに「貧しさを分かち合う社会主義」の国でした。

語学研修でしたが、ベトナムの学生との交流会もありました。その交流会で彼らは自国の伝統的な踊りや歌を披露してくれるのですが、それに対して私たちは日本の文化で返すことができず、経済的には「豊かな」国に育った私たちが自国の文化について何も知らないことを痛感しました。それ以来、日本人としてのアイデンティティとは何か、そういったモヤモヤとしたものを引きずって考えるようになりました。

２．民舞との出会い

当時、私は大学では経済学部でしたが、そのまま企業に就職するには抵抗があるモラトリアム時期にいました。将来の進路について決めかねている時、先輩の勧めもあってベトナムに行くことにしました。この滞在で少しでもベトナム語を学び、ベトナム貿易関係会社の就職を考えていました。しかし、前述したような当時のベトナム情勢の下では、とても就職できる企業もなく、それ以上に滞在中にベトナムの厳しい現実を目のあたりにして、自分の進路を変更せざるを得ませんでした。同行した他の外国語大学ベトナム語学科の学生でさえも同様でした。

そこで、一度決心した進路を絶たれ将来どんな道に進むかを考えたときに、貧しさの中でも向学心に燃えているベトナムの子どもたちに教育の可能性を感じ、大学卒業後、通信教育で教師を目指すことになります。

教育実習で実習担当の先生に組合の教研集会に誘われ、そこで「わらび座」の方が披露した「ソーラン節」と出会い衝撃を受けました。この「ソーラン節」は後に「わらび座」の創作と分かるのですが、当時は、これが「日本の伝統文化」だ、「アイデンティティ」だと感動し、それまでの河内音頭に代表される盆踊りとは全く違う躍動感で力強い踊りに、今までモヤモヤした霧が晴れるようようでした。そして、教師になったらこの「ソーラン節」を子どもたちに

伝えたいと強く思うようになりました。

1984 年、講師を経て新任教員となりました。ある日、私の机の上に一枚の案内ビラが置かれていました。「ソーラン節」も取り上げている体育同志会の民舞教室案内ビラです。早速いくつかの民舞教室をまわり「ソーラン節」を覚えて、秋の運動会の集団演技で「ソーラン節」を行いました。学年の教師たちを巻き込み、学年主任は歌、アコーディオンは音楽専科、太鼓は私と生演奏で、大漁旗もつくり演技もストーリィ仕立てにしました。本当に勢いだけで粗削りな取り組みでしたが、子どもたちは生き生きと踊り保護者もその姿に感動していました。この反応に私たち教師も大きな達成感を味わい、「ソーラン節」の教材としての可能性を感じました。まさにこの時、学生時代ベトナム滞在で感じたアイデンティティの喪失を、この「ソーラン節」で払拭することができ、日本の文化、とりわけ民舞を子どもたちに教えていきたいと思いました。

３．大阪支部民舞実践の誕生

この 1984 年には同志会大阪支部第二回支部大会が豊能で開催され、これにも参加してきました。確か実行委員長は渡瀬克美さん、全体基調提案は安武一雄さんだと思います。お二人とも私とあまり歳も違わないのに、研究や実践に基づいた話を堂々と話され刺激を受けたことを覚えています。民舞分科会で「黒川のさんさ」を習い、そこで大阪支部民舞プロジェクトのメンバーと出会うのです。同志会研究大会定番の大交流会フィナーレで、参加者全員が「ソーラン節」を踊ったのには本当に驚き感動し、その勢いで同志会の会員となりました。

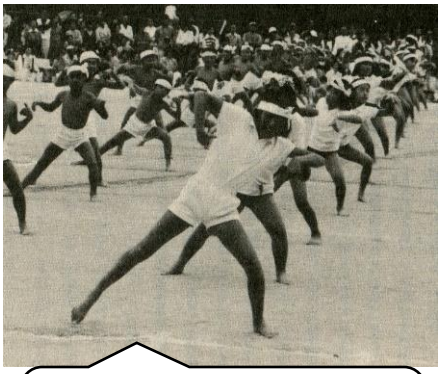
この時すでに大阪支部民舞研究実践は深化発展していて、その成果は「運動会の種目・演技編」（民衆社・1984 年）にまとめられています。とりわけ、大阪支部発足の地、枚方における殿一小学校の青年教師たちの民舞実践は先進的なものでした。殿一小の青年教師たちは、運動会集団演技の指導が市販のレコードを使い歌に合わせてダンスを振りつけてお茶を濁すという、教師の「行事消化への責任感」だけになっていたことに憂いていました。そこで出会ったのが民舞でした。1978 年、殿一小若手教師 7 人が秋田県わらび座本部で開催された体育同志会全国大会に参加しました。その時のメンバーの一人松下孝雄さんは、当時のことを次のように回想しています。（大阪支部ニュース 2018. 1 月号）

同志会の夏の全国大会が秋田のわらび座であり、7 名が夜行寝台列車で京都からはるばる秋田まで行き「大阪に殿一小あり！」を全国の仲間に宣伝してきました。このわらび座で習った北海道の「ソーラン節」、岐阜の「春駒」、富山の「コキリコ」の民舞を秋の運動会でそれぞれの学年で実践し、子どもたちもノリノリで練習し、保護者も大感激で応えてくれて大成功の運動会になったことを記憶しています。市川純子さん、田中敦子さん、安田喜久子さん、柿木圭子さん、大垣美恵子さん、柿木昭一さん、松下孝雄の 7 名でした。その後、山本雅行さんが殿一に来て、枚方の、大阪の同志会が不動のものとなったのは皆さんのご存知の通りです。

４．運動会を変える「運動会の種目演技編」（1984 年 7 月 10 日・民衆社）から

はちまきをまいていると、５年の女子が「ソーラン節やって。」「くっさ。におうわ。」とコソコソと言っているのが聞こえました。それを聞いて、カットときて「ソーラン節おどったら、なにがおかしいねん。ゆうてみいな。あんたらが、おどるゆうきがあらへんだけとちゃうのんか。」といったら、「なんやの、４年のくせに。」といって、さっさと歩いていってしましました。その日はやる気もうすれて、ろくにおどれませんでした。

家に帰って考えていると、心の中にいるわたしが「あんたが正しい。日本人のくせに、日本のおどりのすばらしさのわからんのはかわいそうな子や。」と言いました。そや、そうなんや！あの人たちに、それをおしえてあげよう。がんばるぞォ。そんな気もちがくやしさと入れかわって、いい気分でいると、はっとしました。一ヵ月まえまでのわたしはあの五年生だった。それがいまさかさまになっている。そうだ、先生たちのきもちはいまのわたしのきもちといっしょだ。と思って、わたしは前なんかよりずーうっと力いっぱいがんばってすることができました。　　―第４章　冨島「ソーラン節」実践から―



殿一小学校「ソーラン節」
第３章　市川　木下　橋本

この４年生の子どもの作文は、教師自身が「わらび座」の踊りに日本の文化のすばらしさを再発見した感動を、そのまま、子どもたちにぶつけていき、子どもたちの日本の踊りに対する認識を変えていった勢いを感じさせます。

この民舞実践は「人間としての感情を表現できる子どもに育てたい。そして一人でなく多くの人と関わって生きていこうとする人間本来の気持ちを呼び覚ましたい」という教師の願いを「わらび座」の民舞を教材化することで実現しようとしました。従来の運動会の表現運動に違和感を持っていた青年教師が民舞に感動し、それを教えた子どもたちの変革する姿、そして保護者の熱い支持を受けて、自分たちの民舞実践に自信を持つことができたのです。これを背景にその他諸々の教育実践についても職場で自由に語り合う仲間を増やしていきました。まさに民舞実践を通して、子どもを中心に据えた教育論議ができる民主的な職場づくり、学校づくりがされていきました。

なお、本書には大阪支部から、市川純子さん、木下恵津子さん、橋本喜久子さん（第３章「民舞」）、冨島清さん（第４章「ソーラン節」）、大村晃彦さん（第５章「御神楽」）の５人が執筆されています。

５．大阪支部民舞研究実践の特徴

学校教育で民舞実践の契機となったのが、1968 年「第１回民族舞踊を学ぶ会」でした。この

集会は明治以降の舞踊教育がダンス一辺倒への反省から「日本の子どもに日本の踊り」をテーマに掲げ開催されました。主催者の中森孜郎さん（宮城教育大学名誉教授）は「わが国の舞踊教育の歴史において画期的な意味を持つ」と語られています。この集会の基調講演「今こそ民族文化の継承と発展を」は、「わらび座」の創設者である原太郎さんがされています。当時「わらび座」は、日本の民族歌舞の再創造をめざしていて、集会参加者も「わらび座」が再創造した民舞を学び、それを教材化し実践していきました。まさに「わらび座」が民舞実践の出発点でした。

しかしながら、その後、同志会では、進藤貴美子さん（元北海道教育大学）、清水頭より子さん（埼玉支部）、広島支部の皆さん、また、東京民舞研の皆さんは、「わらび座」の「再創造民舞」から、その元となった民俗舞踊を研究実践の対象にしていきます。民俗舞踊の現地保存会とも交流しながら自らの踊りも習熟し教材化に取り組まれてきました。こうした実践の代表的なものは、東京の和光小学校の学校ぐるみの民舞の取り組みです。（「民舞に恋して」園田洋一著・新日本出版社 2015 年）

殿一小学校「荒馬」
お囃子も教師の手で

一方、大阪支部は、現地民俗舞踊の教科内容研究には向かわなく、再創造された「わらび座」の踊りを研究実践の対象にしていきました。民舞発表のほとんどが運動会であったため、いかに限られた時間内で効果的に子どもたちが学習し表現できるか、その指導法研究が主でした。その成果として民舞の授業づくりのポイントを次のようにまとめました。①踊りの全体像をつかんで部分へ、そしてまた全体へ　②子どもの発達認識に照応した教え方（動きの言葉化）　③グループ学習　④組織性（授業をどう組織するか）⑤民舞の歴史を現地から学ぶ。また「舞踊教育でめざす子ども像とつけたい力」についても一定の見解を発表することができました。（「まるごと日本の踊り小学校運動会 BOOK 演技編」いかだ社 2009 年）　こうした指導法研究の深化は、民舞教室の役割が大きかったように思います。大阪支部では 1983 年 6 月に第 1 回民舞教室が開かれますが、それ以降現在まで各ブロックで民舞教室が脈々と受け継がれています。これは他支部にはない大阪支部独自の大きな特徴と財産です。この民舞教室は、支部財政に貢献するだけでなく、支部会員の民舞指導の力量向上と、同志会と民舞が大阪の地で「市民権」を得ていく場にもなりました。1992 年 1993 年民舞教室には大阪全体でそれぞれ 456 名、474 名もの参加があり、それ以降も 1990 年代は毎年 200 人以上の参加がありました。

６．「南中ソーラン」と大阪支部

「南中ソーラン」は北海道の稚内南中学校独自の学校文化の一つです。1991 年ロック調の「Takio のソーラン節」を聞いた教師が「これは今の子どもに受ける」ということで、この曲に合わせて生徒たちの意見を取り入れながら新たな振り付け生み出し校内で発表しました。自

分の曲が南中で使われていると聞きつけ、この学校の取り組みに感激した伊藤多喜男は、友人の舞踊家・春日寿升と協力し、踊りを一層洗練させて今の「南中ソーラン」が出来上がりました。そして稚内南中学校郷土芸能部は、1992 年第 9 回日本民謡民舞大賞（テレビ東京）に出場し審査員奨励賞受賞、続く 1993 年第 10 回日本民謡民舞大賞（テレビ東京）で日本民謡民舞大賞受賞しました。

余談になりますが、この頃私の母親が日舞を習っていて、この二つのビデオを日舞教室から持って帰ってきました。母親は、この中学生のエネルギーほとばしる踊りに感激していましたが、当時の私は「わらび座」の「ソーラン節」に傾倒していましたので、「南中ソーラン」を「邪道」と切り捨てたのを今でも覚えています。

この二つのテレビ出場で「南中ソーラン」は一躍有名になりますが、それは教育関係者というより日舞、民謡愛好者の中のほうが大きかったと思います。92 年と 93 年の踊りの振り付けを比べてみると、92 年は、かなり「わらび座」の「ソーラン節」の振りの要素が取り入れられていましたが、93 年のものは、よりアップテンポのロック調で民舞の特徴的な動きがないものに変えられていました。それが今、全国的に踊られている「南中ソーラン」です。

その後、大会受賞の軌跡は、1997 年テレビ東京で「ドキュメンタリー・人間劇場」として放映され、さらに 1998 年映画「稚内発 学び座 ソーランの歌が聞こえる」が封切られ、日本各地で上映運動が巻き起りました。この映画では「日本一荒れていた学校」を教師と保護者、そして地域の方々が一緒になって学校再生に取り組み、その中心に「南中ソーラン」が位置づけられていました。（ただ、事実は異なり、教師、保護者、地域一丸となって「荒れ」を克服した数年後に、「南中ソーラン」が誕生しました。）

大阪支部は、いち早くこの「南中ソーラン」の教育的価値に気づき実践化していきました。その代表的実践は、大村晃彦さんの「子どもが、保護者が、地域が変わる」（1999 年）の取り組みです。当時、子どもたちの「荒れ」が「学級崩壊」「学校崩壊」となり社会問題となっていました。大村さんの学校でも 6 年担任の持ち手がないほど切羽詰まった状況に追い込まれていました。大村さんは「荒れた」 6 年生の立て直しの切り札として「南中ソーラン」を取り入れました。この「南中ソーラン」実践は試行錯誤しながらも卒業式まで続き、最終的には子どもたちは見事に立ち直って小学校を巣立っていきました。まさに「学び座」の映画を彷彿させます。さらに、子どもたちの変革する姿に感動した保護者たちが、いろいろな困難を乗り越えて青少年健全育成推進会の主催で「学び座」の上映会を成功させることになりました。

このような大村実践に代表されるような実践は、当時大阪支部で「南中ソーラン」を取り入れた教師の共通の成果でした。折しも「総合的な学習の時間」が創設され、教科と切り離し教える内容も不明確なものを上から押し付けられる中、私たち大阪支部は学力のつく総合学習として、この南中ソーラン実践を提起することができたと思います。体育科としての表現活動、家庭科としての衣装づくり、運動会に向けた自治活動、そして保護者との共同、これらの集大成として運動会の発表がありました。これはまさに「生きる力」つける総合学習で、上からの押し付けを実践で切り返すという同志会大阪支部の真骨頂だと言えます。

しかし、「南中ソーラン」が大きなブームになり、残念ながら今日のように、かつての実践の形骸化が起こるに至っては、これを学校で取り組む意義や価値があるのか、今一度問い直す必要があるのではないでしょうか。

７．「ミルクムナリ（エイサー)」と大阪支部

1994 年山口大会（全体基調提案は OSBG’Z 会長黒井信隆さん）の「文化交流の夕べ」で沖縄支部が披露した「ミルクムナリ（エイサー)」に参加者一同衝撃を受けました。深々と頭を下げるお辞儀から始まり、沖縄歌謡曲に合わせて太鼓やパーランクを叩きながら踊る様は、今まで私たちが知っていた「民舞」とは全く異質なものでした。大阪支部、特に中河内ブロックの面々は、この踊りの魅力にはまり、子どもたちに踊らせたい、実践したいという要求が高まりました。そこで、山口大会後、沖縄支部の方数名に大阪まで来てもらい講習会を開き、このミルクムナリを覚えました。この踊りも「南中ソーラン」のように、音楽や表現形式に人の心に引き付けるものがあり、実践化が進み多くの学校で踊られるようになりました。奈良ブロックの牧野満さんは、ファイバークラフト紙を太鼓の革に代用したパーランクを開発、作成しました。今や教材屋さんが、そのノウハウを使ってパーランクを売り出しています。

当時を振り返ってみますと、交通費、宿泊費、講師料という多額なお金を出し合って講習会を開いたり、衣装や道具など試行錯誤しながら手作りしたりと、当時のメンバーの民舞実践にかけるエネルギーの凄さを感じます。

「ミルクムナリ」については、沖縄支部の山内慶一さんが「これは沖縄の伝統的民俗舞踊でない」と事あるごとに言っていました。事実、この「ミルクムナリ」は、沖縄の創作太鼓集団「琉球國祭り太鼓」が沖縄の伝統芸能エイサーをもとに再創造させた踊りです。沖縄の村ごとに伝統的なエイサーがありますが、それらのエッセンスをベースに新たなエイサーを創り出し、それが人々に支持され普及していきました。このような流れは「わらび座」の「創作民舞」も同様で、自分たちが踊って楽しむ伝統的民俗舞踊から、観る側にとっての「見栄え」や「見ごたえ」などの「表現」を重視してきたように思います。大阪支部は、伝統的な民俗舞踊より、こうした「創作民舞」に魅力を感じ、教材化、実践化を進めてきたと言えそうです。

８．なぜ、大阪の子どもに他の地方の民舞を教えるのか

前号で、大阪支部は伝統的な民俗舞踊より「創作民舞」を教材化した「学校民舞」を実践してきたと述べましたが、そうした「学校民舞」に対して進藤貴美子さん（元北海道教育大学）は、民俗舞踊とは似て非なる「手具体操風」に仕上がっているとして、民俗舞踊は「最小のエネルギーで最大の効果をあげる」身体技法が備わっており、「学校民舞」実践には、それが全くないと批判されてきました。また、民俗舞踊を習うということは「失われた身体文化」を取り戻していくことで、「民俗」に内在する諸価値に目を向けるべきと主張されています。

一方、私たちの「民舞」の多くの実践は運動会の発表のためがほとんどで、力強さや躍動的な動きなど、見栄えの良さという見る側にとっての「表現」を重視してきました。進藤さんが言われるように「失われた身体文化」や「身体技法」を子どもたちに教えるという視点が欠落していたように思います。

私は、「大阪の子どもたちに他の地方の民俗舞踊をなぜ教えるのか」と問われれば、「全国の各地域に伝えられてきた土着の民俗舞踊を広く国民の共有しうる民族的文化へと発展させたいと願う」（中森孜郎「日本の子どもに日本の踊りを」）からです。

一地方の民俗舞踊の中には表現豊かで芸術性の高いものがあります。それは、その地方の舞踊だけのものであっても、その地方に留まらず日本全体の普遍的な「民族舞踊」になりえると思います。それに加えて、日本の伝統的な体の使い方である「身体文化」や「身体技法」を内包する民俗舞踊は、同様に日本全体の普遍的なもので、全国の子どもたちに共通に教えるべき内容になるのではと考えるようになりました。つまり、優れた芸術性のある「表現」と日本の伝統的な「身体文化」「身体技法」を備える民俗舞踊は、日本全国の子どもたちが共通に学ぶべき教育的価値があると言うことです。

９．「今別の荒馬」と「大森のみかぐら」の教材化を

大東市立灰塚小学校　「たのスポ」表紙 1996 年

数ある民俗舞踊の中で、日本固有の「身体技法」や「身体文化」を保育・学校教育の中で子どもたちに教えるには現段階では「今別の荒馬」と「大森のみかぐら」が最もふさわしいと思っています。この二つの踊りは、民俗舞踊の特徴的な動きである「ナンバ振り」や感覚的な言葉ですが「みえ」「ねり」「間の取り方」「キレ」が備わっています。また、何よりも子どもたちを惹きつけるリズムと躍動感のある「表現」も兼ね備えています。

改めて現地の「今別の荒馬」や「大森のみかぐら」が持っている日本固有の「身体文化」と「表現」の本質を損なわないような教材化と実践化が求められます。

１０．「荒馬」と大阪支部

「荒馬」が大阪に伝播してきたのは、二つのルートがありました。一つは「わらび座」の「荒馬」、もう一つはダンプ園長こと高田敏幸さんの「ダンプの荒馬」（注１）です。両者とも「今別の荒馬」がベースになっています。ただ、大阪で「荒馬」が実践され始めたころは、馬なしの手

綱だけで踊るというスタイルでした。馬を作成するには、職場や保護者との合意形成が必要でかなりの労力を要しますが、手綱だけでも「荒馬」の力強さや躍動感を表現できるとあって、大阪支部の民舞教室でも紹介し、この手綱だけの「荒馬」（私は「学校荒馬」と名付けました）は、多くの学校で実践されることになりました。しかし、この「学校荒馬」は「今別の荒馬」の文化的特質や「身体文化」を含まない、ただ和太鼓のリズムに合わせた「手具体操」になってしまったと思います（注２）。しかしながら、この「学校荒馬」は時代の制約もあり不十分でありましたが、教師、子ども、保護者に熱烈に支持されたことは確かでした。「学校荒馬」は、大阪の地でも「荒馬」の認知度を高め、馬を付けた「荒馬」実践の窓を開いたのは確かです。

現在、大阪支部の若手が「学校荒馬」を乗り越え、馬の衣装も作成し、それを付けて踊る「荒馬」実践を展開してきました。北河内ブロックの中村俊介さん、大西朱夏さん、泉州ブロックの宮本千絵さんたちは、「わらび座の荒馬」ではなく、「荒馬」を長年研究されている宮城支部の沼倉学さんから直接「今別の荒馬」を学び、学年ぐるみで「荒馬」を実践されました。

また、長年、ダンプ園長から「ダンプの荒馬」の指導を受けてきた塩田桃子さんをはじめ幼年体育プロジェクトの皆さんは、青森県今別町の「荒馬祭り」を取材し、「今別の荒馬」そのものから直接教材化し「ダンプの荒馬」を乗り越えようと試みています。

さらに、宮本千絵さんと大西朱夏さんは、広島民舞研と交流し、同会が主催する「中野七頭舞を踊る会」（指導は岩手小本中野七頭舞保存会）に参加し、現地の踊りを学び習得しようとしています。

このように、大阪支部の若手たちが、私たちができなかった現地の「民俗舞踊」から直接学び、教材化、実践化に挑戦していることに大きな希望を感じています。

相愛大学「体育」 2018 年

１１．民舞を学校教育で教えるとは、そして課題

私も宮本さん大西さんと一緒に広島民舞研主催の「中野七頭舞を踊る会」で現地保存会の方ら踊りの指導を受けました。熟達された躍り手の方々の指導は、ある程度踊りを覚えた人にとって自分の踊りに磨きをかけるには、とても意味あるものだと思いますが、初心者にはかなり分かりづらく踊りを覚えるのにはかなりの時間を要します。これは、かつて「わらび座」の方から踊りの指導をしてもらった時も同じように感じました。伝統を受け継いできた教え方、私たち大阪支部では「お師匠さん方式」と呼んでいましたが、学校現場での指導時間の制約もあり、この伝授法によらない民舞の指導法の研究をしてきました。

先の進藤貴美子さんは、伝統的な教授法（稽古）が重要であり、これが日本固有の身体技法を獲得する道として「民俗芸能は長い年月をかけ手間暇かけた所産であり、こうした時間軸は現在の学校教育に馴染まないというなら民俗舞踊を教材化することはあきらめなければならない」と突き放しますが、一方で「身体技法を言説化することによって民俗舞踊の教育内容を解明できるのでは」とも言っています。また、久保建さんは「『舞踊文化固有の方法』を正面に据えな

がら『科学の方法』をうまく併用して、文化研究・教科内容研究とそれに基づく教育実践を追求していく」としています。

このことから、私たちが「わらび座の御神楽」を指導する際に、子どもたちと一緒に唱えた「ケン・ケッテー・パー」という「動きの言葉化」は、子どもたち日本固有の身体文化を獲得させることができたのか、もう一度検証してみる必要がありそうです。ただ、この「動きの言葉化」は、子どもたちが教え合って上手くなるグループ学習の手立てとなったことは間違いないと思っています。また、ダンプ園長は「荒馬」の「U ターン（向き変え）」で、この動きに「こんにちは」「さようなら」と名付けました。これは「ひとと人が結びついていく学び、あそび」が表現されていると思います。この子どもの発達に照応した動きの「言葉化」は動きを覚えるにとどまらず、教師が子どもに託す願いをも込められているのではないでしょうか。

このような教え方が、進藤さんや久保さんの意図する「身体技法の言説化や民舞指導の在り方」と重なっているか分かりませんが、いずれにしても「『教材研究』を抜きにして『子どもが感動する』ということだけで、これを取り上げるのは危険。これらの『教材研究』をしないのなら、即刻私たちは民舞指導から撤退すべきである」（出原泰明さん）という警鐘は、今の日本の右傾化が進む中では、民舞実践をする上で肝に銘じなければなりません。

最後に、同志会大阪支部の民舞実践研究は、1978 年当時北河内ブロックの青年教師たちが「わらび座で味わった感動を子どもたちに伝えたい」から始まりました。この「感動」を乗り越えて「民俗舞踊」を直接取材し、深い教科内容研究と教材研究で、学校教育の中で民舞の実践化の挑戦を大阪支部の若手教師に託したいと思います。

（注１）ダンプ園長も「わらび座の荒馬」に衝撃を受けられ、当初はこの「荒馬」を子どもたちに教えていましたが、その後、「今別の荒馬」からも学び、子どもたちのからだがしなやかに耕されるよう発達を踏まえた「ダンプの荒馬」を創り上げました。ダンプ園長は「荒馬」のおもしろさを跳躍ととらえています。（「耕せ耕せ、ぼくらのからだ」高田敏幸著）

（注２）「学校荒馬」を「今別の荒馬」「わらび座の荒馬」「ダンプの荒馬」の体の使い方と比較分析して、「学校荒馬」の限界と課題について見解を述べています。（第 32 回大阪支部研究大会提案集 2017 年）